



音楽写真家・小原敬司の写真ネガ～本学の貴重資料



小原敬司(1896-1986)

昭和音楽大学教授

学芸員課程・美術史担当 宮崎克己

昭和音楽大学は、小原敬司(1896-1986)が撮影した写真のネガを約 24 万コマ分所蔵しています。小原は昭和の初期から後期まで、専ら音楽家とその舞台を撮影した写真家です。第 2 次世界大戦をはさんだほぼ半世紀をカバーする彼の写真は、近代日本の音楽史を語る上で大変貴重な資料になっています。

これらの中には、昭和音楽大学の前身、1940 年に下八川圭祐が創立した東京声専音楽学校の初期の姿を写した珍しい写真もあります。また下八川が中心メンバーの一人となり、1934 年に旗揚げした藤原歌劇団の舞台写真も数多く含まれています。

小原は、晩年になってようやく、セルロイドによるロールフィルムを使い始めました。これは昭和の始めからすでに出回っていたのですが、大判の質の高い写真ができなかったため、彼はロールフィルムの質が向上するまでほとんど、ガラスに感光材を塗布した「乾板」と呼ばれるものを使っていました。こちらはきめ細やかな写真が可能だった反面、



小原敬司が撮影した藤原義江(ガラス乾板)



ガラス乾板の厚さは約 1.5mm。



図書館内で開催中の「小原敬司展」に併せて関連資料を展示している。



舞台や著名な音楽家の写真ネガ約 24 万コマを所蔵。



高価であり、割れやすかったうえ、撮影の際に大きな箱のような写真機と三脚を持ち運ばなくてはなりません。ストロボを焚くことを極力控えるべきコンサート会場で、望遠レンズもなく、小原は大変苦労して写真を撮りました。

第 2 次世界大戦前後の音楽雑誌には写真ページはそれほど多くなく、掲載されているものの大半が写真館などで撮影された音楽家のポートレート写真でした。少しずつ増えていた演奏中のステージ風景は、半分以上を小原が撮影していたようです。

これらの写真のネガを保管している本学図書館では、2016 年以降学芸員課程と協力し、原版より新たにプリントをした写真を館内で展示しています。現在、乾板から手作業による高度なプリントのできる業者が少なくなっていることもあり、プリントしたのも貴重な資料として保存・蓄積していきます。今年からユリホール、テアトロ・ジューリオの廊下、ホワイエなどでも、機会をみてこれらを展示します。

小原敬司の写真を通して、昭和期の音楽家たちの活動、とりわけ昭和音楽大学の先輩たちの活動を振り返ってみましょう。



宮崎克己 教授